# なぜ英語が話せないの

〈53〉

## 会話上達法—第三部—

# 分野ごとに積み重ね

## 多くの表現身につけよう

「電話」「天気」「病気・ケガ」「政治」「経済」……など、会話内容によって分けた分野が五十にも達すると、長続きしない英会話の学習にも励みと充実感がわいてくる。新たに分類すべき内容が出たら、分野を新設し、既設の分野には未知の表現をこつこつ追加していく。

久留米市の会社員Aさんは「犯罪」の分野まで設けた。日常会話にはあまり登場しない分野だが、外人と社会問題を話す際には結構、出てくる。

例えば「彼は死刑判決を受けた」は「He was sentenced to death.」「終身刑」なら、toのあとを「imprisonment for life」とする。「彼女には有力なアリバイがある」だと「She has a good alibi」「背中を刺された」は「I was stabbed in the back」といった具合。暴力団抗争などで「三人の通行人が流れ弾に当たってケガした」場合は「Three pedestrians were wounded by stray bullets」である。

Aさんは、ベトナム戦争当時、英字新聞をよく読んだが、出てくる単語といえば、日常会話とは無縁のものばかり。「mine」（地雷）「martial law」（戒厳令）「grenade」（手りゅう弾）「curfew」（夜間外出禁止令）…とウンザリした。

しかし「戦争」という分野を設けていたお陰で、それを利用したり、表現を他に応用できたケースも一度や二度ではない。

「かつてアメリカ人から〝日本人は、なぜ反ソ感情が強いのか〟と聞かれたんです。第二次大戦末期、ロシアは日ソ不可侵条約を一方的に破棄して日本に宣戦布告したのも一因と答えたんですが、宣戦布告を何と言うか、普通の会話本には出ていない。このときは、戦争に関する表現をいろいろ覚えていてよかったと思いました。

Aさんは『At the Yalta conference Russia agreed to declare war on Japan』（ロシアは、ヤルタ会談で日本に宣戦布告することに同意した）と説明した。

どんな分野の会話表現でも、知っていれば決して損はしない。こつこつ積み上げ、集大成することが大切なのである。

最近は実用会話無視の英語教育に関する批判本も多くなっている